

武蔵野日曜聖書講筵

旧約の福音（2）

――詩篇第103篇――

1976年11月21日
（「活けるキリスト」誌135号 1977年5月号より転載）

小池辰雄

まえがき 福音の根底 歴史に現われた神の恩寵 過ぎゆくものと過ぎゆかざるもの 天的実存と讚美

●まえがき

今日は詩篇第103篇。これはある意味において、詩篇150篇中の最大なるものと言ってもいいかと思います。それで「旧約の福音」と題しました。

これを読んでいると、もう解説するのがいやになってしまふほど、すばらしい詩篇です。これに福音のすべてが入っている。旧約にこんな詩篇があるかと思うくらいです。何と言っても旧約の世界は律法が強いです、そういった陰はほとんど見えない。どうしてこんな詩篇が生まれたろうかと怪しむくらいです。しかも地獄的なやみの102篇に対して、103篇は天国的なよろこびの詩篇です。それはちょうど、ロマ書7章と8章みたいです。或いはイザヤ書34章と35章にも似ています。

●福音の根底

「ダビデのうた」とありますが、たとえばダビデの作でなくとも、彼の魂はこういう福音に向いていました。

「わが^{たましひ}靈魂よ、エホバをほめまつれ、

わが^{うち}衷なるすべてのものよ、そのきよき^{みな}名をほめまつれ。

2 わが^{たましひ}たましひよ、エホバを^{ほめ}讚まつれ、

そのすべての恩恵^{めぐみ}をわするるなかれ。

3 エホバはなんじがすべての不義をゆるし、

汝のすべての疾^{やまい}をいやし、

4 なんじの生命^{いのち}をほろびより贖^いいだし、

仁慈^{いつくしみ}と憐憫^{あわれみ}とを汝にこうむらせ、

5 なんじの口^{よきもの}を嘉物^{よきもの}にてあかしめたもう。

斯てなんじは壮きて驚^{わかや}のこころ新^{あらた}になるなり。」（詩篇103・1〜5）



これが第一段です。この第一段は極めて個人的な救いの消息、恵みの消息を、何とも言えなく表現しています。何とこれは旧約をつきぬけた魂かなと驚嘆いたします。

1 わが^{たましひ}靈魂よ、

というのはこの場合「ネフェシユ」という字で、英語の「スピリット」でなくて「ソール」の方です。ドイツ語で言う「ガイスト」でなくて「ゼーレ」です。ヘブライ語の「ネフェシユ」は、ちょうどギリシヤ語で言う「プシュヘー」にあたります。

「わがたましいよ」というのは、霊と心の間のような言で、漢字では魂にあたるわけです。「氣息」の意もあり、肉体を生かしている霊的生命の坐です。

主をほめまつれ、わが^{うち}衷なる^{すべ}凡てのものよ、

「わがたましい」と言つて、今度は、「わが衷なる凡てのもの」と。ヘブライの詩は、よく対句的に言います。

主をほめまつれ、

に対しては、

そのきよき御名をほめまつれ。

と応じています。「主」に対しては、「きよき御名」。「わがたましい」に対しては、「わが衷なる凡てのもの」。「衷なる凡てのもの」と言うのは「ケレブ」という字ですけれども、英語で言う「バウル」です。即ち魂と五臓六腑、全的な存在としての自分そのものです。それでこの句は「魂も体も一切が」という意味です。心も体も主をほめまつる。主は、すなわち御名です。彼の聖なる御名「シエーム・コディシヨ」。それで、

2 わがたましいよ、エホバを^{ほめ}讃まつれ、

と。この「ほめまつれ」という言葉はもと「バーラック」という字で、「恵む」という字です。だから、

「恵みを神に帰せよ」

という意味がある。「バーレキー・ナプシー」は、

「神を恵みあるものとせよ」

という意味です。

そのすべての恩恵^{めぐみ}をわすれるな。

と。この恩沢というのは「ヘセド」ではなく「ゲムール」という字の複数形が使つてあつて「めぐみのわざ」といった意です。

私たちの過去は、つまずいたり、ころんだりしたのにもかかわらず、全部めぐみに包まれているわけです。すべての恩沢と言つても、恩沢をただ数えたつてしようがない。恩沢において、恵む者それ自体、恩恵者即ち、

「恵みの主体である神様を忘れるな」

と言うこと。そうしないと御利益信仰になります。



「私はこれこれの恵みに与りました^{あずか}」

と言って、恵みだけを喜んでいたら、いわゆる御利益信仰になってしまふ。恵みの奥の神、そのものが恵みの主体ですから、

「恵みなる神を忘れるな」

ということですよ。

「神様は恵みも^{わざわい} 禍もくだす。これは神の業である」

と、ヨブ記の中にあるように。だから、

「どんなことに遭^あつても、わたしはただ御名をたたえる。エホバ与え、エホバ

取り給う。エホバの御名は讃むべきかな！」(ヨブ1・21)

という有名な言葉があります。

³ エホバはなんじがすべての不義をゆるし、

汝のすべての疾^{やまい}をいやし、

「汝」というのは、自分に言いかけている。

「癌は癒えないじゃないか」

と。そうじゃないですよ、癌だつて癒えるんです。根源的には癌も癒えてしまふ。すべて現象にとらわれているうちはだめですよ。現象の奥の世界をつかまないと信仰は本ものにならない。どうせ厳密に言えば、みんな病人ですよ、地上にいる我々は。どんなに健やかな人だつて、つねに病菌をもつていて、これと戦っているにすぎません。そこには何らかの欠陥があります。魂も、どんなに立派そうに見えたつて、自我になやまされている破れ器。だから万人はみな罪人^{つみびと}という。

「義人なし、ひとりだになし」

とパウロが言っている通りです。キリストだけが例外者です。そのキリストも罪を知っていらつしやるですよ、ただ彼は罪に陥らなかつた。けれども、我々と同じように人間の弱さは全部知っていらつしやる。だから、神に、

「汝の聖意を…」

と言って、自分をいつも委ねておられた。

「私は罪を犯さないんだ」

と言って、平気な顔をしているイエスではないですよ。キリスト自身は地上にイエスとしてあつた間は危機的存在であつた。イエスは罪を知っていらつしやつたけれども、罪を犯さなかつた、負けなかつた。

「すべての不義をゆるし」

と、すべての不義をゆるせるのはキリストだけです。神様はゆるし給うけれども、キリストにおいてゆるす。仏教的な大悲大慈とはちよつとちがう。すなわち、キリストの十字架においてゆるし給う。だから新約の私たちの立場では、十字架の贖いのゆえに、過去、現在、



未来の一切の罪はすでにゆるされている。人間としてはどこまでも、つまりいたり、ころんだりしますよ。けれども、それを自分でどうのこうのしたつてどうにもならん。むしろゆるされている自分をはつきり受けとつて前進していく前むきが大切です。つまりいたら、「すみません!」

とひれ伏して進んで行くわけです。そういった十字架の絶対恩寵、これがすなわち、「すべての不義をゆるし」

という根底の現実です。キリストはすべての罪を十字架においてゆるし、すべての病をみたまの力で癒し給う。そのような実力あるキリストの愛が、一切の罪と病に対する勝利です。聖霊を与え、私たちに永遠の生命を与えてくださっているから、私たちは、やがて肉体は死んでも、その奥に、死んでも死なない霊体がきている。これはキリストがヨハネ伝でおっしゃっている通り、

「われを信する者は死んでも死なない」

ということ、「信する」と言うのは、

「キリストが神の子であるということを信する」

のではない。

「キリスト自身を、即ち永遠の愛の生命を受けとる」

ということです。

そのようにキリストを信受していれば、病はすでにいやされている。それは相対的な健康ではない、絶対的健康の世界に入れられている。霊体を与えられているから、肉体は、血気の体は滅びても、霊の体が生きていく。事実、相対的にも病はずいぶん癒えますよ、正直。聖霊の力がくると、本当に御霊のバプテスマを受けると、今までの精神的また肉体的な調子の悪かったのが忘れたようになおっちゃった、という例はいくらでもあるのだからね。それは一つのしるしです。はつきり現われてくる。キリストはそのような信に基づく祈りを通して、既にどれほどの人々を、こんな私を通してでも、助けてくださったか、ちよつと数えきれません。

霊的な本当の具体性、これを受けとつていけば、もう相対的現象は問題でなくなつてきますから。だから、

³ エホバはなんじがすべての不義をゆるし、

汝のすべての疾やまいをいやし、

が然りアーメンとなる。

「こういう場合はどうなんですか?」

なんて、「こういう場合」なんてありやしないですよ。信ずるとはそのような無条件的な根源的なものです。

⁴ なんじの生命いのちをほろびより贖いいだし、



まさにその通り、死は単なる関門であって、キリストに在って生くるかぎり、滅びでも何でもない。

いつくしみ あわれみ
仁慈と憐憫とを汝にこうむらせ、

キリストの贖罪愛は、いわゆるいのちよりも強いものです。キリストの霊は贖罪愛の霊ですから。「仁慈と憐憫」は「ヘセドとラハム（の複数）」という字ですが、両方共大事です。愛といろいろな憐れみです。

⁵ なんじの口を嘉物^{よきもの}にてあかしめたもう。

これは旧約だから、「ながらうる限り」と書いてある。「嘉物」は、新約のルカ伝では聖霊のことを、

よきもの
「嘉物を賜わざらんや」

とキリストが言われたあの嘉物は、まさに聖霊のことでしたが、新約の光で読めば、

「汝は永遠に聖霊にてあかしめられる。斯てなんじは壮^{わかや}ぎて鷺^{あらた}のごとく新になるなり」

これはイザヤ書40章の終りに出てくるあの句と同じです。「鷺のごとく」、非常に力強い生命的な事態を

「鷺の如く、若鷺の如く」

と言います。嵐に向かって飛び立つて行くからね、鷺は。嵐が吹いてくると喜ぶ。いい加減な風じゃだめなんだ、鷺なんていうやつは。そして太陽に向かって進んでいく。ドイツのフイヒテと言う哲学者が、ドイツ人の魂をそういう鷺に譬^{たと}えて表現している。

「太陽に向かって限りなく進んでやまないのがドイツ魂である」

ということを、「ドイツ国民に告ぐ」という有名な演説の中で叫んでいます。あれはナポレオンに蹂躪^{じゅうりゅん}されていた時だからね。その後ヒスマルクも、

「我々ドイツ人は神を畏^{おそ}れる。その他の何ものもおそれない！」
と叫びました。

「斯^{わかや}てなんじは壮^{あらた}ぎて鷺のごとく新になるなり」

1節から5節で、はつきりとそういった

「十字架・復活・聖霊」

の恩寵のかくれた福音を語られている。どうしてこんなすばらしいことを、キリストに出つくわさない旧約の人が言えるかとあやしむばかりです。ヤーヴェーの神を本当にそういつた贖罪愛の神、聖霊の力の神としてはつきり受けとっている。

●歴史に現われた神の恩寵

「⁶ エホバはすべて虐^{しいた}げらるる者のために
ただしき さばき
公義と審判とをおこないたもう。」



7 おのれの途をモーセにしらしめ、
おのれの作為をイスラエルの子輩にしらしめ給えり。

8 エホバはあわれみと恩恵にみちて
怒りたもうことおそく、仁慈ゆたかにまします。

9 恒にせむることをせず
永遠にいかりを懷きたまわざるなり。

10 エホバはわれらの罪の量にしたがいて我等をあしらいたまわず、
われらの不義のかさにしたがいて報いたまわざりき。

11 エホバをおそるるものにエホバの賜うそのあわれみは大いにして、
天の地よりも高きがごとし。

12 そのわれらより愆をとおぎけたもうことは
東の西より遠きがごとし。

13 エホバの己をおそるる者をあわれみたまうことは
父がその子をあわれむが如し。」(詩篇103・6〜13)

これが第二段、6節〜13節。ここにモーセとかイスラエルの子らという歴史が出てきた。個人の体験から歴史の方へ向かって、イスラエルという歴史的な恩恵のあとを、彼は思いながら語っているわけです。

6 主はすべて虐げらるる者のために
公義と審判をおこないたもう。

「セデカー」「義」と「ミシュパツト」「審き」という字はよくでてきます。神の義を以てする公平なる審きです。

「虐げらるる者」というのは、歴史的にはイスラエルの民がエジプトに半奴隷状態でいたでしょ。あれがエジプトに虐げられていたが、

「彼らを救つてやれ」

と、モーセに言われた。その出エジプト記第3章あたりが背景になっているとみてもいいかと思えます。

7 おのれの途をモーセにしらしめ、
おのれの作為をイスラエルの子輩にしらしめ給えり。

「己の途をモーセにしらせ」と言うのは、そういうことです。出エジプトの途、虐げと患難から救つてやる。だけれども、イスラエルの子らはモーセが受けとったようにはなかなか受けとれなかった残念な面があります。

預言書にもよく、「出エジプト」ということは出てくる。虐げ、迫害、患難からの贖い出し。エジプトの長子たちがやつつけられたですから。それからもう一つ、出バビロニアというのが。これは、バビロニア捕囚、紀元前6世紀の初めの頃、587年、あのバビロニアにやつ



つけられて、エルサレムが陥落して、おもな人たちがバビロニアに伴れてゆかれたが、ペルシアの王クロスが解放してくれた。520年前後のことです。バビロニアから解放されたのは、イスラエルの神に対する不信仰の罪からのゆるしでした。出エジプトの方はイスラエルの患難からの救いでした。出エジプトと出バビロニアはこういう二つの種類の神様の救済で、これは歴史的に極めて著しいできごとでした。出エジプトと出バビロニア。我々の人生でも、この出エジプトと出バビロニアが繰り返されるわけです。

⁸ 主はあわれみと恩恵にみちて

怒りたもうことおそく仁慈ゆたかにまします。

ここに「怒り」という言葉が出てくる。なぜ神様が怒ったか。出エジプトの時は、神様はイスラエルに対して何も怒ることはない。怒りの方は何かと言うと、神の義が怒りという姿で現われるわけですから、すなわち不信に対する神の怒りです。不義というのは神様との関係が破れることが不義ですから、不信はすなわち不義である。不信に対するところの怒りだから、この怒りになると、これはバビロニア捕囚のことが前提となっているとみてさしつかえない。だから、出エジプトと出バビロニアと両方をこの詩人は見ているものと思う。

⁹ 恒にせむることをせず

永遠にいかりを懷きたまわざるなり。

新約では、「¹⁰ 羔の怒り」というのがある。キリストの怒りである。これは、もう世の終りです。キリストが限らない恵みをもつて、即ち十字架・復活・聖霊の恵みをもつて、いつでも誰でも無条件に迎えようとしているのに、いつまでも恵みを拒み、不信をつづけていれば、ついに神の怒りが爆発するときがくる。世界は傍若無神になって、恐ろしい兵器がたくさん出てきた。一触即発、世界は火の海になっちゃう。そういうような破滅が来たら、そこに羔の怒りが現われる。

だけれども、そういう終末を来らせようとは神様は思っておられない。

¹⁰ 主はわれらの罪の量にしたがいて我等をあしらいたまわず、

われらの不義のかさにしたがいて報いたまわざりき。

何と深いゆるしの神様か。我らの罪愆を見て見ぬのである。聞いて聞かぬのである。キリストの十字架が神の目をそらせ、神の耳に対する防音となっている。

¹¹ そは主をおそるるものに賜うそのあわれみは大いにして、

天の地よりも高きがごとし。

畏神とは平伏しのたましいとなることです。

¹² そのわれらより愆をとおされたもうことは

東の西より遠きがごとし。

いつくしみは主を畏るるものに大いにして、天の地よりも高きがごとく。いつくしみはも



のすごい広大なる高い恵みである。またそれが地にくだってくると、そのわれらより愆を遠ざけたもうことは東の西より遠きがごとし。我らの罪過を遠ざけて問題とせず、

「お前はこうだ、ああだ」

なんておつしやらない。

¹³ 主の己をおそるる者をあわれみたまうことは

父がその子をあわれむが如し。

「畏れる^{おそ}」というのは平れ伏す心です。畏れるというのは、「こわがる」ことではないですよ。「畏れかしこむ」という字なんだから。今の聖書にはみんな「恐」の字が書いてある。こわがるのではなく、ひれ伏して信賴することである。そこには神様の恵みがくるし、神様の権威がくるんです。ひれ伏さないで、「おれは」なんてやって傲慢になるともうそれはサタンの手下になっているわけです。

あわれみの心は実力のある者がもつ。父なる神は無量の実力者であるから、深いあわれみをもち給う。キリストは神様を、

「父よ！」

と呼んで、父のあわれみにおのれを全托された。では、父に対して「母」はあるか。それはマリヤではない。言うべくばそれはみ霊である。聖霊です。聖霊は愛の霊でありますから。母性愛が執り成す愛であるように、み霊は執り成しの霊でもあることはヨハネ伝のキリストの言によって明かです。御霊は正に執成^{とりなし}の霊！そこで三位一体という

「父・子・聖霊」

は、

「父・子・母」

となりましょう。イエスの父は神、イエスの母は聖霊といっても可^よいわけ。こういう表現はどこまでも霊的な表現ですから、その点誤解なきようにねがいます。聖霊はそのような執成しの霊です。その意味で祭司、坊さんは本来大切な存在です。

イザヤ書に「父なる神」のことがはつきり語られている。

「汝はわれらの父なり、アブラハムわれらを知らず、イスラエルわれらを認め

ず、されどエホバよ汝はわれらの父なり、上古^{いにしえ}よりなんじの名^{みな}を我らの

贖^{あがないぬし}主といえり」(イザヤ63・16)

「神は父であり、贖^{あがないぬし}主である」

という。イザヤ書1章から39章までを第一イザヤと言います。40章から55章までが第二イザヤ。56章から66章までが第三イザヤ。三人の人の筆に成るもので時代的にも相前後してますが、三人の精神は一貫している。しかも第一イザヤは「聖なる神」を、第二イザヤは「贖いの聖子」を、第三イザヤは「聖霊の消息」を特色としているといっても可いので、まことにふしぎな構造です。聖書全66巻、イザヤ書は全66章、だから全聖書をイザヤ書は、あ



る意味において代表していると言ってもいいくらいです。まあ、

「旧約の中から何をとるか？」

と言われたら、文句なしにイザヤ書をとるね。あんたがたは狂える人の如くなって身読しなさいよ。とにかく、キリスト者もむきにならなくちゃダメですよ。私はかつて、預言書に浸り込んで、その聖書はボロボロになってしまったよ。

「^{こゝに}愛にその民にしえのモーセの日をおもいいでて^{いひ}曰けるは、かれらとその群の牧者とを海より携えあげし者はいずこにありや、彼等のなかに^{きよきみたま}聖霊をおきしものは何処^{いずこ}にありや」(イザヤ63・11)

「海」とは紅海のことです。さっきの出エジプトのことです。「どうしてくださるんですか」と神様に迫っているけれども、イスラエルの民がだめになってしまったから、神様の方でそっぽを向いているんだ。それを

「神様、どうしてくださるんですか!？」

と言って、この預言者は一生懸命食いついているわけだ。その神に向かって「父」と呼びかけている。民族的な角度から時々、預言者が「父」と言っているのを、もつと個人的な意味で、また世界的な意味で「父」という言い方をつかまえてやったのがイエスでした。

「⁸されどエホバよ汝はわれらの父なり、われらは泥塊^{つちくれ}にしてなんじは陶工^{すえつくり}なり。我らは皆なんじの御手のわざなり」(イザヤ64・8)

この

「泥塊^{つちくれ}にして陶工^{すえつくり}なり」

と言うのはエレミヤ記第18章、第19章にも出てくるね。

まあとにかく預言者イザヤ書におきましては、よく「聖者」、聖なる者という言葉や、また今言った「父」と言う言葉が特に出てくる。そういうように歴史を顧みて、そして、出エジプト、出バビロニア、患難からまた罪からの解放、それを忘れて遠ざけ給うこと云々と。

「神の怒りはいつまでも続いてはいない。神様の怒りは本当に憐みが隠されている

怒りだから、ひれ伏して行け。ひとつも恐いことはない」

と。神様は無条件にゆるし給う。そこで、我らは新約のパウロの言うように、

「われ汝^{うち}の中に、汝^{うち}が中に」

という内在関係、「イン・アイナnder」の関係、「神・キリスト・我」というこの三者一如の関係。こういう現実^{現実}に祈りで入っていかなかったら、いつまでたってもしょうがない。中へ入らなくては。

「わが魂よ、わが内なるすべてのものよ、汝の中に入りまつれ」

と。こういう福音的神秘を今のキリスト者がもつと本ものにしなければダメです。こういう一如的神秘は聖霊によって可能となる。

「十字架で贖われています」



と、ただ言っているだけでは前進できません。そこに御霊がないからです。パウロがはっきり言っているじゃないですか、パウロさんをどうしてくれるんですか。

「私はキリストの中に、キリストは私の中に」

と言うのは形容的に言っているのですか、形容じゃないですよ。現実ですから、本当に。だから、「イン」「の中に」の世界に入る。「信仰」の仰の字はいらないんだ。はじめは仰くかも知れないけど、交わる世界に入らなくては。魂の交わりの世界です。私はもう「しんこう」の「こう」の字を仰ぐと書くのをよそうかな。「信交」と書く。もう思い切ってやらなければだめなんです。第二の宗教改革をあなた方がやってください。

●過ぎゆくものと過ぎゆかざるもの

はい、今度は第三段（14節〜18節）。

「14 エホバは我等のつくられし^{さま}状をしり、

われらの塵なることを念い^{おも}給えばなり。

15 人のよわいは草のごとく、

その栄えは野の花のごとし。

16 風すぐれば失せてあとなく

その生^おいいでし処にとえど尚^{なお}しらざるなり。

17 然^{あわれみ}はあれどエホバの憐憫はとこしえより永遠まで、

エホバをおさるるものにいたり、

その公義^{ただしき}は子孫のまた子孫にいたらん。

18 その契約をまもり

その訓諭^{みさとし}を心にとめて行^なうものぞその人なる。」（詩篇103・14〜18）

人間のはかなさを、その通りに書いてあるよ。聖書はあらゆる現実をごまかしなく書いてある。何々主義なんてのは全部入っている、聖書の中には。全部そんなものは溶かしちゃった。包んじゃった。突きぬけちゃった。

だからドラマだと言っているんです、私は。

「聖書はドラマだ。ドラマの中で線太く生きてくれなくちゃ困る」

と。私のこういう日曜の集会に来て、言葉じゃないですよ、その響き、その魂、その気合を受けとってくれなくちゃ、いつまでたっても始まらない。

18 その契約をまもり

その訓諭^{みさとし}を心にとめて行^なうものぞその人なる。

18節はまさに旧約的です。我々にはかない器なんだけれども、

「主のいつくしみは永遠より永遠に（メオラーム・ウェアッド・オーラーム）主をおさるる者の上にあり。その義は子孫の子孫にあらん」



と。「いつくしみ」と言つて、今度は「義」と言っているでしょ。「愛、義、恵み」、ここらはすっかり預言者イザヤに似ています。

「神の義はその福音のうちに現われた」

と言つた、あのロマ書の元は^{もと}こういうような言葉に歴史的にはあるわけです。愛と憐みと義が一つです。これは審く義ではない。神様が憐むこと自体が義なんです。これをマルチン・ルッターはなかなかつかめなかった。

「神の義とは審く義ばかりだ」

と思つてね、それで苦しがつていた。ところが、

「義は与えられるものであった」

と。神様は義を与える。それが即ち憐みなんです、愛なんです。

今は霊的人物の飢饉です。けれども、要するにひれ伏さなければいかん。^{おそ}畏るべきものを畏れないから一切の狂いがきてしまつている。問題は教育に、そして一切の文化文明の現象の奥に福音の、宗教の世界がないからダメなのです。私は倒れるまでこのことを叫んで行きます。神様の前にだれでも降参すれば、すばらしい神の義を賜わつて、本当に筋金の通つたことになっていくわけです。上から力がくるし、本当の愛はくるし。

「その義は子孫の子孫にまで及ぶほどである。その契約をまもりその^{みさとし}訓諭を心にと

めて行ふものぞその人なる」

^{みさとし}訓諭を心にとめて、律法を心にとめて行ふ人、この精神はまあ旧約ですが、しかし、行ふということは極めて大事なことです。突っ込んで言えば、神の言を本当に心にとめれば、

「わが言は靈なり力なり」

ですから、行に転じます。神の言は即ち神の行に転じて我々を実行せしめる。どんなに破れ器であつても、人間的完全よりもすばらしい。どんなにすばらしい造り花も、自然の花にはかなわない。とにかく自然というのはすばらしい。私は自然を見ていても、決してただ自然を見ているんじゃないです。そこに神様の心を見ているんだからね。

われらのつくられたさまがまことにはかない。^{よわい}年齢は草のごとくと。まあいくら生きても大体、百歳位までですよ。イザヤ書に、

「百歳で死ぬものもなお若しとせらる」(イザヤ65・20)

なんて書いてある。

「その栄えは野の花のごとし」

そういう人生の諸行無常、

「色は匂へど散りぬるをわが世たれぞ常ならむ」

ということ。

「いつくしみはとこしえより永遠に」

と。これも質的につかまえなければダメです。即ち、一日を即ち千年の如く生きる。「一日



千年」という言葉がある。

「千年は一日の如く、一日は千年の如し」

と、ペテロがそう言った。一日を本当に生きる人は、質的に永遠なのです。永遠の今を生きるような生き方になりますから、だから現実の相対的なはかなさも、最早突破してしまっている。神様に、その憐みに浴する者は誰でもがそうです。さつきはイスラエルの歴史から、今度は人类的に突破しているわけです。ここでは、個に徹すると人类的に突破する。だから14節から18節までは、個人の体験から、そういった人間そのものの、人類そのものに、万人に向かつての恵みの事態に突き抜けていると、そう見ていいわけです。これが第三段でした。だからこの詩の構造はすばらしいよ。

●天的実存と讃美

第四段 (19節～22節)。

「19 エホバはその寶座みくらをもろもろの天にかたく置たまえり、
その政權まつりごとはよろずのもののうえにあり。

20 エホバにつかうる使者つかいよ、

エホバの聖言みことばのこえをきき、

その聖言をおこなう勇士ますらおよエホバをほめまつれ。

21 その万軍よ、その聖旨みことばをおこなう僕等しもべらよ、

エホバをほめまつれ。

22 その造りたまえる万物よろずのものよ、

エホバの政權まつりごとの下なるすべての処にてエホバをほめよ、
わがたましいよエホバを讃めまつれ。」 (詩篇103・19～22)

「主はその宝座みくらをもろもろの天にかたく置え給えり」

と。今度は天の話になってきた。

「その国はよろずの物をすべおさめる」

神の国は、バシレイヤは、神の支配し給うところ。

「主の御使よ」

今度は天界のことだ。宝座みくらだとか御使だとか。

「その聖言みことのこえをきき、その聖言をおこなう勇士ますらおよ、主をほめまつれ」

勇者は、主をほめまつれ、主に恵みを帰せよと。

「そのすべての万軍よ、その聖旨みことばをおこなう僕等しもべらよ、主をほめまつれ」

聖言を行う者が勇士なんです。神言の行者、これが本当の英雄です。あなた方、ひとりびとりは英雄です、女丈夫じよじょうふなんです。神言の行者が本当のエホバの僕、神様の僕、

「われはキリストの僕しもべなり」



とパウロが言った。僕、本当の僕が勇者なんです。イエスほどの勇者はいません。最大の勇者です。イエスは小羊と言われるけれども、小羊は獅子より強いんだ。神様に完全にひれ伏している人は最大の勇者です。そして、ひれ伏しているから、その聖意を体現している者、行者、御心の体現者です。

それで、宝座^{みくら}だとか御使だとか、万軍だとか言ってるでしょ。今度は天界だ。そして、こちらは僕とあるから、天地相応えているところの天地万有に突き抜けている。

「その造りたまえる万物よ」

でしょ。万有だ。

「そのおさめたもうすべての処にて主をほめまつれ、わがたましひよ主を讃めまつれ」

最後にまた最初の言葉にかえっている。まさに円環関係になっていきますね、すばらしい詩だね、これは。個から民族、人類にきて天地に突き抜けちゃった。まあこんな詩篇はちょっとないですよ。私は驚いたね。

今朝、読んでいて、「ああこれだ、これだ！」と。実はきのうからどれにしようかと思ってたんだ。今朝、これだこれだって、そういうことなんですよ。とにかく、そういう詩篇第103篇というのは、「旧約の福音」、この題が一番いいと思った。旧約に現われているところの福音、実に深遠にして壮大だからね。パウロとヨハネを一緒にしたようなことを言っている。これがダビデならダビデはすごいなあと思うけれども、出バビロニアが入ってくるところはダビデではないですよ。大体ここに出てくる詩は、相当、預言者の言葉と同類のものが出てくるから、これは預言者と同列の誰かが、第三イザヤと同列のような人が書いたんでしょう。あんた方は楽しくならなかったですか。

（1976年11月21日 東京キリスト召団武蔵野日曜聖書講筵にて）

